

2023年11月5日 礼拝説教要旨

ハイデルベルク信仰問答講解Ⅱ 21 「教会を信ず」

ミカ7：18～19、フィリピ2：4～8

問54 「聖なる公同の教会」について、あなたは何を信じていますか。

答 神の御子が、全人類の中から、御自身のために永遠の命へと選ばれた一つの群れを、御自分の御霊と御言葉とにより、まことの信仰の一致において、世の初めから終わりまで集め、守り、保たれる、ということ。そしてまた、わたしがその群れの生きた部分であり、永遠にそうあり続ける、ということです。

教会は、神の御子イエスさまがわたしたちを選び、集めてくださった群れです。人間が作った集まりではなく、イエスさまが永遠の命へとわたしたちを選び集めてくださっていることを信じる信仰が重要です。そうでなければ教会は単なる人間の集まりになってしまいます。

「神の御子が、全人類の中から、御自身のために永遠の命へと選ばれた一つの群れ」とあります。注意していただきたいのは、「わたしたちのため」ではなく「御自身のため」とあります。わたしたちが教会に招かれているのはイエスさまがそのことをお望みだということです。だから「御自身のため」なのです。どうしてでしょう。そのようにイエスさまの体に結ばれてこそ、わたしたちは神さまの御心にかなって御前に回復されるからです。

人間は神さまとの約束を破り、樂園を追放されました。そこで神さまとの関係が断絶しました。せつかく神さまのかたちに、良いものとして造られたにも関わらず、自らそのかたちを壊してしまいました。それが聖書の示す罪であり、そこに死が入り込みました。今の世界を見て、誰もこのままでいいとは思っていないでしょう。今の時代はまさに死の世紀です。疫病に、気候変動に伴う災害、貧困、そして戦争。このような世界を神さまはお望みなのでしょうか。わたしたち個々の歩みもこのままでいいのでしょうか。人間は神さまに良いものとして造られたのですから、もっとよりよく生きることができるはずで、それを勝手に諦めていないでしょうか。

神さまはこの世界を決して諦めておられません。だからこそ全人類の中からわたしたちを教会へ集め、守り、保たれるのです。教会はそのためのシェルターであり、病院であり、保養所です。ここでわたしたちは癒されて本来の自分を取り戻すのです。そのために神さまは世の初めから終わりまでわたしたちを集め続けてくださいます。そのような場所が備えられていることは何という幸いでしょう。教会はわたしたちが罪の現状に留まるのではなく、神さまのかたちを回復されて、よりよく生きるために神さまが用意してくださった場所なのです。

人間が御前に回復され、よりよく生きることについて、次の問55、56が教えています。

問55 「聖徒の交わり」について、あなたは何を理解していますか。

答 第一に、信徒は誰であれ、群れの一部として、主キリストとこの方のあらゆる富と賜物にあずかっている、ということ。第二に、各自は自分の賜物を、他の部分の益と救いのために自発的に喜んで用いる責任があることをわきまえなければならない、ということです。

教会で、わたしたちはイエスさまのあらゆる富と賜物にあずかります。この富と賜物とは、御前に回復された命、神さまの御心に適う新しい命と考えてよいでしょう。それまでは罪に支配され、神さまと断絶状態にありました。それがわたしたちのあらゆる交わりを破壊しました。

しかしこれからはイエスさまの富と賜物を受け、交わりを回復されるのです。「第二に、各自は自分の賜物を、他の部分の益と救いとのために自発的に喜んで用いる責任がある」とあります。その賜物を自分ではなく誰かのために用いて生きる歩みが始められます。それがよりよく生きることであり、世の中に貢献する歩みを作り出します。わたしはマザーテレサを思い起こします。彼女の社会貢献は誰もが知ることですが、その原動力は何より毎朝のミサ、イエスさまの体にあずかることでした。それによってイエスさまからすべての富と賜物を受け、またそれを他の部分の益と救いのために自ら喜んで用いていく彼女の歩みが作られました。もちろんわたしたちもそのように生きることができるのです。

問56 「罪のゆるし」について、あなたは何を信じていますか。

答 神が、キリストの償いのゆえに、わたしのすべての罪と、さらにわたしが生涯戦わなければならぬ罪深い性質をも、もはや覚えようとはなさらず、それどころか、恵みにより、キリストの義をわたしに与えて、わたしがもはや決して裁きにあうことのないようにしてくださる、ということです。

人間がよりよく生きるために、神さまは赦しを与えてくださいました。赦しとは、お咎めなしということです。誰からも負い目を感じていない、責められることがないのはわたしたちの歩みを軽やかにします。わたしたちは神さまの御前に罪を犯したのですから、当然、責めを負って然るべき存在です。しかし「キリストの償い」イエスさまの十字架による罪の贖いを通して、わたしたちはすべての罪を赦されて、御前にお咎めなしとされました。これは驚くべきことです。わたしたちが自分で償ったわけでもなく、イエスさまがわたしに代わってこの償いを果たしてくださいました。

さらに「罪深い性質をも、もはや覚えようとはなさらず」とあります。神さまはわたしの罪をなかったことにしてくださいます。それどころか忘れてくださるというのです。神さまがわたしたちの罪を思い出さないことは大変ありがたいことです。それゆえにわたしたちはもはや責めを感じることもなく、背中を丸めて、下を向いて生きるのでもなく、堂々と頭をあげて生きることができるのです。そしてわたしたちもまたこの赦しに生き始めるのです。これまでわたしたちはこんなにも赦されてきました。そのことを思えば、わたしたちはもっと誰かを赦すことができるのではないのでしょうか。人を裁くことに躍起になっている世界の只中でわたしたちはそれに流されず、その逆を行くのです。そういう自由を持っているのはわたしたち信仰者だけでしょう。この世に流されてはいけません。わたしたちはもっとよりよく生きるためにイエスさまに選ばれ、教会に集められているのです。

天の父よ。わたしたちが罪の中に留まるのではなく、神さまのかたちにあずかり、よりよく生きるためにあなたはイエスさまの御体なる教会を備えてくださいました。そしてそこに集め、守り、保ってくださいます。どうぞイエスさまの招きに応え、ここで交わりを回復し、赦しを生きる者とされますように。この殺伐として時代にあって、どうぞあなたの富と賜物を分かち合い、これを隣人のために用いて生きることができるよう。主の御名によって祈ります。アーメン。